

# 善光寺式阿弥陀三尊

# 香取遺産

Vol. 36



▲背中の刻銘（左）、勢至・阿弥陀・観音の三尊像（右）

長野県善光寺のご本尊を模したとされる、特色ある形式の仏像を「善光寺式阿弥陀三尊」と呼びます。

阿弥陀如来を中尊とし、観世音菩薩、勢至菩薩を両脇侍とする三尊像です。多くは中尊が50cm前後の銅造の立像です。鎌倉期以降、関東や東北地方を中心に全国各地で盛んに造られました。県内でも30数例現存することが確認されており、その一つが府馬の修徳院にも伝わっています。

修徳院は、満寿山宝満寺を号する天台宗の寺院です。寺の言い伝えによれば、天喜3年（1055）千葉常将の三男昌天により開基された古刹で、ご本尊は葉師如来です。

この三尊像は、明治初期

に廃寺となった同地区の西観院の本尊を移したものと伝えられています。

阿弥陀像の像高は49cm、両手首の他は一铸です。残念ながら両手首は失われていますが（左手は後補）、善光寺式中尊は、右手は施無畏印（掌を開き正面に向ける）、左手は刀印（人差し指、中指の二指を伸ばし、下に下げる）が特色です。で、この印を結んでいたと推察され、光背用と思われる柄が背中に鑄出されています。

両脇侍の像高は、観音像30・4cm、勢至像30cm、いずれも梵篋印（胸前で両掌を水平に重ねる）を結んでいます。これも善光寺式の特徴の一つで、両像とも肩から先を別铸として嵌め込

んでいます。八角宝冠を戴き、その正面に観音像の証である阿弥陀像と勢至像の証である宝瓶を鑄出しています。

三軀とも保存状態はたいへん良く、鍍金も残っています。中尊の背中には、正応3年（1290）、匠瑳北条大寺郷の平次太郎入道が造立した旨の刻銘があり、両脇侍にも同様の刻銘があります。製作年代の明らかかなものでは、県内でも最古の部類に属します。

修徳院の三尊仏は秘仏のため、通常は拝観できませんが、現在、長野県信濃美術館へ出品展示（5月31日まで）されています。（県指定文化財「銅造阿弥陀如来及び両脇侍立像」、昭和42年12月22日指定）